

『論註』の法界身釈

韞 津 照 信

五五〇年に真諦に訳されたといわれる『大乘起信論』を見ると、分別事識―外界が見られるが如くに存在するとす常識的な認識作用―がみるのは応身であり、業識―無明によって一心が動いたところの最も微細な識―にみられるのは報身だ、との説明（平川彰氏の訳を参照）がある。善導の時代になると、もつと仏教学が盛んになり、法界身釈を見ても、「理観か事観か」とか「報身か法身か」ということを論点にする。だが、曇鸞は、そのような議論をあまり持ち出さないようなので、このことに留意して曇鸞の法界身釈がどのようなものかを検討する。五四二年に六七歳で没したと言われる曇鸞は、菩提流支に『浄土論』を授かって、後に『論註』を著した。そこで、曇鸞の法界身釈に強い影響を与えたのは、僧肇と菩提流支だと思ふ。

觀察門の衆生世間の所で菩提流支訳の『不増不減經』の題目が出てきたので、その経を引く。

此の二種の見（常盤大定氏の註では「これは増見減見なり」）は、

乃ち是れ極悪の根本大患の法なり。（中略）此の二種の見は、一界に依止（あし）し、一界に同じ、一界に合し、一切の愚痴の凡夫は、如実に彼の一界を知らざるが故に、如実に彼の一界を見ざるが故に、極悪大邪見の心を起し、衆生界は増すと謂ひ衆生界は減すと謂ふなり

ということを、甚深の義だといひ、「此の甚深の義は、乃ち是れ如来の智慧の境界なり、亦是れ如来心の所行の処なり」と言ひ、更に「甚深の義」と「第一義諦」と「衆生界」と「如来蔵」と「法身」を「即」の語で繋いで「此の法身は、是れ不生不滅の法にして、過去の際にも非ず、二辺を離るゝが故に。」と言ふ。そして、衆生・菩薩・仏について言ふ。「此の法身の、恒沙を過ぐる無辺の煩惱に纏はれ、無始の世よりこのかた世間に随順し、波浪に漂流して生死に往来する」のが衆生であり、「此の法身の、一切世間の煩惱使纏を離れ、一切の苦を過ぎ、一切煩惱の垢を離れて、清浄を得、彼岸の清浄法中に住し、一切衆生所願の地に到り、一切の境

界中に於て突重通達して更に勝者なく、一切障を離れ、一切礙を離れ、一切法中に於て自在力を得たる」が如来・応・正遍知である。衆生界には三種の法がある。その、第一の如来藏本際相応体及び清浄法は、如来不虚妄で不可思議法自性清浄心であり、第二の如来藏本際不相応体及び煩惱使纏不清浄法は、客塵煩惱所染の自性清浄心不可思議法であり、第三の如来藏未来際平等恒及び有法は、

如来藏未来際平等恒及び有法とは、即ち是れ一切諸法の根本にして、一切法を備へ、一切法を具し、世法中に於て真実の一切法と離れず脱せず、一切法を住持し、一切法を摂む。舍利弗よ、我れ此の不生不滅・常恒・清涼・不変・帰依の不可議清浄の法界に依りて、説いて衆生と名く。所以は何、衆生と言ふは、即ち是れ不生不滅・常恒・清涼・不変・帰依の不可議清浄の法界等の異名なり。

と説かれる。常盤大定氏は「第三は前二者を綜合したる根源的の立場であつて、第一の法界と第二の妄法とを、如来藏の上から統合して居る。」と言う。ここから「法界とは衆生の心だ」という『論註』の積が出るのだろう。また、『論註』下巻には、衆生世間を觀察することを述べる前に入第一義諦の積があつた。それは、「彼の無量寿仏の国土の莊嚴は第一義諦の妙境界相なり。十六句及び一句次第して説きつ。知るべし。第一義諦とは、仏の因縁法なり。此の諦は是れ境の義

なり。是の故に、莊嚴等の十六句、稱して妙境界相となす。」というものであり、既出の「第一義諦」と似ている。それは、如来の智慧の境界である。

さて、「界」とは領域の別のことであり、眼界・耳界……法界というように熟語化される。法界とは衆生の心なので、六根と六境で言えば、眼根に眼境が対応するのと同様に意根に法界が対応するのだろう。「己れが縁を行じて他縁を行ぜず。事、別なるを以ての故に。」と述べることから、法界は意根でみるものであり、眼でみるものではない。仏身は、法界として出てくるので、法界身と呼ばれる。

『論註・下』の器世間の三種功德の積の所で、虚空・識・地・水・火・風―六大―のうちの無分別のものは、地・水・火・風・虚空である。如来は分別しないので地・水・火・風・虚空と同じだ、と『浄土論』が言うので、「覚知のない地・水・火・風・虚空と心が同じか」という問いを設ける。蜂に刺されると痛いのがヤマヒルに咬まれても痛みを感じないという例を挙げて、覚知の有無には相手の因縁により違いがあると言う。逆に言えば、(まっすぐな竹筒に入れると、曲がるはずの蛇もまっすぐになるように)分別するものと思われがちな心も実相に入れば無分別になるのである。この問いは、「心は覚知の相だ」ということを前提条件としているが、その前提条件が誤っているのだ。ところで、『肇論』の中の「般

若無知論」の、平井俊榮氏による訳には、

聖人は知ることがないから対象に執著しないわけではない。また対象を知った上で対象に執著しないわけでもない。聖人の知ることとは、そのまま対象に執著しないことであるから、対象に執著することなく知ることができるのである。（中略）聖人の智慧の無は無知（知ることが無いこと）であり、惑者の智慧の無は知無（無を知ること）である。（以下略）

とある。また、「無知」の語は、『観経』の「諸仏如来は是れ法界身なり。（中略）諸仏正遍知海は心想より生ず。」の文句に就いての「法界、無相なるが故に、諸仏は無知なり。」という釈にも出てくる。阿弥陀仏の智慧が無分別智だとか「諸仏は無知なり。」というのは、『肇論』のこの思想を受け入れたものだろう。そして、「法界、無相なるが故に」の「無相」の語は、ひとことでは「かたぢがないこと」であるが、（淨入願心の広略の釈の）「無相の故に能く相ならざること無し。」の文句を見ると、「法性法身という固定した仏身がある」と考えるのは誤りで、「無」には、肯定的な意味が含まれるようだ。

無知は仏の究極の智慧であるので、五念門を修する衆生が法界身を觀察するのに要するものだとかいう議論は、『論註』には出てこない。『不増不減経』の如来蔵思想は、後世のものほど明確ではないのだが、『論註』に受け継がれたのだと

思う。（衆生界の三つの法のうちの特に）如来蔵未来際平等恒及び有法が、前述の「無相」とか「法界が衆生の心だ」という考え方に結びついたのだろう。菩薩は、自分と離れた仏を觀察するのではなく、如来蔵として自分の心の内にある仏を、（智慧をして觀察したまへりき。正念にかれを觀ずることは実のごとく毘婆舍那を修せむとおもふがゆ多なりと。」の文があるように）智慧によって觀察するのだろう。

もともと『観経』では、像觀で諸仏を觀察して次に真身觀で阿弥陀仏を觀察することが説かれていて、像觀は真身觀の前にする練習のものという意味も含まれていたのかもしれないが、そのようなことは、曇鸞には無視された。曇鸞は、法界身ということでは阿弥陀仏と諸仏は同じように衆生の心にあると捉えたようだ。

〈キーワード〉『不増不減経』、無知、法界身

（龍谷大学大学院）